

「我が人生思い残すことなし」第3章

きたごう はると
作：北郷 遥斗

※ 前回までのあらすじ = 昭男の通夜に出席していた雄大とはるか、その席で初めて昭男のこれまでの人生について知ることとなった。戦後の生活の事を殆ど話す事の無かった昭男の人生。雄大とはるかは当時の様子を語る高子と耕造の言葉を一言も聞き漏らさぬよう、聞き入っていた。 =

(尚、ホームページでもこれまでのストーリーを見る事が出来ます。 www.kyodo-keiei.co.jp)

3. 独立

「そろそろそれからの何年間は大変やった。一番下の妹はまだ小学校上がったとこやったし、何としてもみな新しいできた中学までは出したらなあかん。そのことは内らの考えは一緒やったわ」「きみ大ばあさんと内は近所からもろて来た内職をして、昭男じいさんはずっと工事現場で働いて、ここの耕造おじいさんは住み込みで奉公に出て、みんな14、5やで。まだ中学生や。今やったら考えられへん」「でもそれが当たり前やった。その時代、そんな人はいっぱい居はった。いや、親も兄弟もみんな戦争で死んで、もっときつい人もいっぱい居はった」「生きるだけで精一杯やった。今日一日生きるのは大変な事やった。それでもみんな前向いて必死に頑張っ

て来たんや・・・」高子は一気に吐き出すように語ると、ふいに言葉を詰まらせた。「兄貴は自分が家を作るのを誇りにしとった。わしに『耕造、どんどん街が蘇って来るで、もう一ぺん日本の黄金時代の幕開けや』ってよう言うとった」構造が場をつなげた。「昭男じいさんはほんまに日本ていう国が好きやったなあ。もちろん内らも自分のふるさとやし、大好きやけど、また違った。もっと特別ななんか命がけの思いを持ったはった」「そうこうするうちに、早いもので一人、二人とおめでたの話も出て来て、妹達が働き始めるや否や3年も経たんうちに嫁に行き始めた。あの頃は焦ったな。二十歳（はたち）過ぎて残ってんのは内だけやったし、今やったらどうちゅう事ないけどな。やっぱり家に居てばかりやとあかんあ思たな」「ま、それからしばらくしてから近所の人から縁談の話があって、なんちゅう事ない知ってる幼馴染やったんやけど。まとまって結婚することになった。そうやって皆徐々に独立して行った。日本もちょうど世界と仲直りして独立できたばかりやったし、知ってるかサンフランシスコ条約ていうの。あとは一番下の妹だけになった。その頃になってようやく昭男じいさんも肩の荷が降りたんちゃうん。少し余裕ができたからか付き合った人が居て、それが美子おばあさん。あとはばあさんから聞いて」

